

# 郷土かるた、上毛かるたの魅力と意義

——郷土かるた王国「群馬」からの発信——

原口美貴子<sup>1)</sup>・山口幸男<sup>2)</sup>

1) 群馬大学非常勤講師

2) 群馬大学教育学部社会科教育講座社会科教育研究室

(2009年9月30日受理)

## A Study on the “Kyodo Karuta” and “Jomo Karuta”

Mikiko HARAGUCHI, Yukio YAMAGUCHI

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 30th, 2009)

### 1 はじめに

群馬県は日本一の郷土かるたである「上毛かるた」、及び日本一の市町村かるたである「富士見かるた」をはじめとして、全国最多の郷土かるたを有する他の追随を許さないわが国郷土かるた文化の最大中心地である。本稿は、平成20年10月25日の群馬大学教育学部同窓会秋季大会（上毛会館）において山口、原口の両名が行った講演「郷土かるたの魅力と意義—郷土かるた王国群馬からの発信—」の内容をまとめたものである。講演前半の「郷土かるたの基礎基本」は原口が、後半の「上毛かるたの発展と意義」は山口が担当した。なお、講演冒頭の儀礼的な言葉は極力省略した。また、本稿末尾にこれまでの筆者らの研究文献一覧を掲載した。本稿での論述不十分な点については、これらを参考にしていただきたい。

### 2 郷土かるたの基礎基本

(原口美貴子)

日本郷土かるた研究会副会長、群馬大学非常勤講師の原口美貴子と申します。私は群馬大学教育学部、

そして大学院教育学研究科と合わせて7年間荒牧キャンパスにお世話になりました。山口先生をはじめとした諸先生方のご指導を得て、郷土かるたの研究を10数年続けて参りました。本日は郷土かるたの基礎基本編といたしまして、郷土かるたの定義・全国的現状、歴史、教育的効果・意義、そして、最後に、郷土かるたの本質についてお話をさせていただきます。

#### (1) 郷土かるたの定義と全国的現状

まず、郷土かるたの定義ですが、郷土かるた研究会では「郷土を代表するような様々な事象を詠んだいろはかるたの一種」としています。その場合の郷土というのは、学区域や市町村、都道府県など様々なレベルの範囲をいいます。内容は、自然、歴史、産業、文化など多岐にわたっているものです。形式は、「いろは」順、あるいは「あいうえお」順のように、読み札の頭文字が音順に揃っているものとし、この定義をクリアした郷土かるたの代表格が、本日のテーマでもあります「上毛かるた」です。

では、「上毛かるた」のような郷土かるたは今までいくつくらい作られてきたのでしょうか。4択クイズ

です。① 100種、② 500種、③ 1,000種以上、④分からない、さてどれでしょう。……正解は③ 1,000種以上です。私たちの最近の調査によりますと、1,450種にのぼりました。でも本当は④分からないが正解かもしれません。というのも、かるたというのは庶民の文化で、しかも消耗品なので公の記録に残りにくいからです。ですから私たちが知らないかるたは、これ以上たくさんあるのではないかと考えています。

1,450種という数をどう思われるでしょうか。私は正直、こんなに多いのかと驚きました。群馬で生まれ育った私は、「上毛かるた」しか知らないというところから始まって、十数年かけて色々な各地のかるたを調べてきました。その結果、多くの郷土かるたが存在することが分かりました。調べておきますと、だいたいひと月に数種類のペースで郷土かるたが作られています。今朝も上毛新聞を見ていましたら、太田市蕪川地区で「蕪川ふれあいかるた」が作られたという記事が掲載されていました。このかるたは、太田市の蕪川地区生涯学習推進協議会が中心となって製作したそうです。記事には「このかるたは地域の子も達にもふるさとをよく知ってもらい、親しみを感じてもらおうと3年ほど前から製作を企画、会のメンバーが中心となり地域の旧所、名跡などを盛り込んだ独自のかるたの製作に取り組んできた」とあります。このように新しい情報に次々に出会えます。個人が思いつきで作ったような小さなレベルのものだったら、毎日とっていいほどどこかで作られているのではないのでしょうか。本日、10月25日土曜日の今この時間にも全国のどこかで新しい郷土かるたが誕生しているかもしれませんし、現在進行形で製作を進めている地域があるかもしれません。それくらい郷土かるたは今、ブームなのです。今の若い人はかるたなんて見向きもしないだろうと思いがちですが、実は現代のこの高度情報化社会においても、進行中、発展中のモダン文化なのです。

続いて1,450種ある郷土かるたの都道府県別製作数のグラフを見てください。これは2008年4月30日現在での調査集計数ですが、これを見ると一目瞭然、群馬県の郷土かるたの数は、他の多くの都道府

県を大きく引き離して115種、全国第1位の製作数です。ご存じの通り、群馬県では「上毛かるた」を嚆矢に、各市町村や学校などで郷土かるたが多数製作されています。続いて多いのが埼玉県の90種です。埼玉県では1982年に「上毛かるた」をお手本にした「さいたま郷土かるた」が作られています。製作者は埼玉県教育委員会と埼玉県子ども会育成連絡協議会です。つい数年前ですが、埼玉県では82年に製作したかるたを刷新して「彩の国21世紀郷土かるた」を製作しました。大規模な市町村合併やスペースシャトルに乗った若田光一さんなど、現代の状況に見合った内容が新たに読み込まれています。この点では、お手本になった群馬県の「上毛かるた」は先を越されてしまいました。群馬県民の私としては、まるで子どもが親を越えていったかのような複雑な心境です。続いて多いのが長野県、それから東京都、静岡県です。日本全体を眺めますと、郷土かるたの数は西日本より東日本の方が多いようです。これについて山口先生は、「西日本は百人一首文化の方が強いからではないか」と推測しています。

## (2) 郷土かるた製作の年次別推移

続いて郷土かるたの製作年代別グラフをご覧ください。対象としたのは第二次世界大戦後にできた郷土かるたです。このグラフを見ますと、かるたの製作動向は大きく3つの時期に分かれています。70年頃までが第1期、70-90年代が第2期、そして90年代から現在までが第3期です。第1期は戦争直後～70年頃のいわゆる“戦後復興期”です。1947年に誕生した「上毛かるた」は戦後第1号の郷土かるたで、第1期に属します。この時期の全国での製作数はまだ点々とといった状況です。続いて第2期は70年代から始まる“地方の時代期”です。高度経済成長の反省に立ったふるさと創世期ともいわれる時代に作られたかるたですが、第2期の後半90年前後からは生涯学習の要素も加わって、全国各地で郷土かるたが多数製作されました。そして第3期が2000年を挟んだ“平成の市町村合併期”です。合併を機に郷土かるたを作って新たな住民意識、まとまりを作っていく、そんな狙いを含んだものです。私たちもおか

げさまで全国各地に赴いて郷土かるた作りのお手伝いをさせてもらっています。その製作数の多さは、まるでお湯がぐらぐら沸き立つような勢いです。

これら3期の製作数、時代背景はそれぞれ異なりますが、共通していることがあります。それは、各期が時代の切り替わり、大きな転換期であったということです。時代が大きく変わるからこそ、郷土の現状、足元をしっかりと見つめていこう、そしてみんなの力で新しい郷土を作っていこう、そんな強い要求が、郷土かるたを生み出すベースにあったと考えています。ですから、郷土かるたには新しい時代に向かっていく人々の希望や期待が色濃く刻まれている、いわばそのシンボルになっています。なお、最近の郷土かるたの特色として、「いのち」や「食育」、「環境問題」等、現代社会が抱えている問題に視点を当てて作られるものが増えています。内容の幅広さという点で先ほど申しました郷土かるたの定義と合致しないかもしれませんが、地域の生活風土がベースになり、地域住民の主体的な要求で作られているかるたですので、その動向は今後とも追いかけていこうと思います。また、かるたというと紙でできた四角い札がすぐ頭に浮かぶと思いますが、ITが定着した現代では、デジタルかるたとしてインターネット配信をしている新たなスタイルも登場しています。いずれにせよ、日本人とかるたの関係は、時代に切り捨てられることなく、むしろ時代にマッチしたスタイルで息長く続いているようです。

### (3) かるたの歴史とカードゲームの類型

さて、ここでもかるたそのものの歴史についてご紹介いたします。かるたといえば、百人一首やいろはかるた等、ここにいる皆さまにとっては親しみ深い遊びだと思いますが、今の子どもさん達の遊びといえば、TVゲームやパソコンゲームが主流で、かるたといったら国語の時間で百人一首に触れるくらいだと思います。でも群馬県の子は違います。「上毛かるた」がありますので、他県の子どもと比べると格段にかるた遊びをする機会があります。このかるた遊びというのは、実は日本にしか見られない、外国には見られない日本独特の文化ということをご存じて

しょうか。もちろんトランプとか単語カードとか、カードを使った遊びは外国にも多数あります。けれども、日本のかるたのように、ある一枚の札に対して、深い関わりあいのあるもう一枚の札を選んでいく遊び、しかも遊びながら知らず知らずのうちに智識や教養まで身につけてしまうカード遊びというのは他にありません。私は海外の方にお会いする度に、「このような遊びはあなたの国にありますか。」と尋ねていますが、今のところ皆さん「ありません。」と答えます。むしろ「何ですか、それ、面白いですね。教えてください。」と聞き返されます。かるたは日本オリジナルの文化です。ただしこれは現時点での話であって、もしかしたら今後調査を続けていくと外国にも似たような文化が見つかるかもしれません。そうなったらまた興味深い話です。文化の共時性ということで、また新たな研究テーマです。

では、現在日本にあるかるたの種類を紹介します。まず大きく日本独自のカードゲームと西洋伝来のカードゲームの2種類に分かれます。日本独特のものは百人一首やいろはかるた等、智識や教養を身につけるための遊びです。西洋伝来のものは花札やトランプ等、娯楽性、賭博的が強い遊びです。花札というと、日本では江戸時代に庶民の間で大流行し、特に裏社会でかなり盛り上がった遊びです。賭博的な要素が強いので、ここでは西洋伝来のものに分類してあります。

日本独自のカードゲームの発祥は、平安時代の貴族の遊び、貝覆や貝合わせにさかのぼります。二枚貝である蛤貝を一枚ずつに分け、片割れと片割れを探してカチッとぴったり合ったら当たりという遊びです。平安後期になると、貝の内側にきれいな布を貼ったり歌などを書いた歌貝が作られます。南蛮貿易時代にトランプの原型であるポルトガルからカードが入ってきますと、賢い日本人の誰かが紙の利便性に気づいたのでしょう。蛤貝を紙に変え、名称も歌かるたとして、小倉百人一首や伊勢物語などの和歌を揃えた歌かるたが作られるようになりました。ちなみに、かるたの語源はポルトガル語もしくはスペイン語の「carta」、カードや手紙など紙製のものを表す言葉からきています。やがて江戸時代になり、

庶民文化が栄えてきますと、生活の知恵を織り込んだ「ことわざかるた」や、ことわざの出だしをいろは順に揃えた「いろはことわざかるた」が作られて大ブームになります。こうした流れの中でいつしか誕生したのが「郷土かるた」であると考えています。一方、ポルトガルカルタの方は、秀吉の時代に禁止令が出されるほど人気でした。朝鮮出兵に出た兵士が戦よりもカルタに夢中になってしまうくらいだったそうです。以後もたびたび禁止令が出されたようですが、ダメって言われても楽しいものは残るものです。そこで、ここが庶民の知恵の素晴らしさですが、江戸時代半ばになると札の絵柄がガラリと変わったカルタが登場します。ひと目で賭博とわかる派手な柄から、いかにも雅な花鳥風月の柄へと見た目を変え、さらに名まで花札と呼ばせて禁令下をくぐり抜けてきました。また、現代のトランプですが、明治の開国後に改めて西洋から伝来しました。このように、郷土かるたの歴史をひもといていくと日本文化の流れが見えてきて興味深いです。私たちの祖先は長い時間をかけて、西洋の文化を取り入れつつ、独自のかるた文化を創り上げてきたのです。

#### (4) 郷土かるたの教育的効果、意義

このような歴史と広がりを持つ郷土かるたですが、ここで郷土かるたの教育的効果、意義についてお話したいと思います。まず指摘できるのは、楽しみながら郷土を認識できるという点です。これは知識面、情意面の両方に関してです。過去に山口先生との共同研究で、群馬県児童・生徒・学生に対する「上毛かるた」遊びの感想を調査しましたが、「楽しく面白い」「群馬県の勉強になる」という回答が大変多く出てきました。また、群馬県の歴史的人物についての知識度、好感度、重要度について、「上毛かるた」に詠まれている人物と詠まれていない人物を取り上げて比較調査をしたところ、「上毛かるた」に詠まれている人物の方が知識度も好感度も重要度も高い結果となりました。このことから分かるのは、やはり人間は“知ることから始まる”ということです。人間の愛着や関心は、まずその対象を知ることから生じます。地域でしたら、まず地域をよく知ること、

それが地域への愛着や関心に発展します。だとしたら、郷土かるたはその重要な入り口になる、そう私たちは考えています。

それと、昨今子どもの身体性の問題が話題に出ることが度々ありますが、郷土かるた遊びは五感、すなわち「見る」「聞く」「話す」「触れる」「嗅ぐ」等、幅広い感覚に働きかける遊びであると指摘できます。「見る」という感覚については、郷土かるたで遊ぶ時、私たちは取り札に集中し鋭く見つづけなければなりません。焼き付くほど繰り返し見て、何がどこにあるかを記憶します。そうすることで、札が読まれるやいなや、一瞬でその札を取ることができるようになります。「上毛かるた」の県大会に出てくるような選手は、何度も何度も繰り返し練習をして鍛えています。その練習の一つに「裏とり」という方法があるそうです。これはかるたの取り札を並べた後、数分間の記憶時間をとって、全ての札を裏返しにし、札の絵が見えない状態で取っていく方法です。ですから子ども達はわずかな記憶時間のうちに、何がどこにあるか全て覚えてしまわなければ競技ができません。すさまじい訓練です。これで集中力や記憶力が鍛えられないわけはありません。また、こうしておぼえた札は一生忘れられないでしょう。「聞く」という感覚ですが、これは読み手の声に耳を澄ますという力です。最近はどこへ行っても大音量の生活に慣らされてしまっていて、小さな声やささやきに集中して耳を澄ますことが難しくなっていると思います。本当はそれが大事だと思うのですが、今はなかなかそういう体験がしづらい暮らしです。かるた遊びには静けさが必要です。しーんとした一瞬、読み手の息づかいまで聞き取れるほど耳を澄ますことが求められます。子どもの中には、読み手が息を吸った時点で次に何が詠まれるのかを感知してしまう強者もいるそうです。また、「話す」という感覚についてですが、これはかるたの札を読む時の滑舌、よく通る声で発音するという力です。以前「上毛かるた」の県大会で長年読み手をされている方にインタビューしましたら、「子ども達によく聞こえないと苦情を言われるのが悔しいので、鏡で口の動きを確認しながら練習を積みました。」とおっしゃっていま

した。「上毛かるた」の県大会は、小学生から中学生までの選手が200人規模で集まり、3つの年齢組に分かれ、団体戦と個人戦、あわせて70あまりのコートで一斉に競技します。読み手は一人、もちろんマイクは使いますが、その声は畳450枚分の全コート隅々に一瞬で聞き取れるようしっかりと発しなればなりません。特に「ほ」や「こ」で始まる札については紛らわしく、何度も何度も練習したそうです。それと、かるた特有の七五調のリズムも重要です。七五調は日本語の作りにぴったりです。聞いていて心地良いので自然と耳に残ります。ちなみに、七五を足した12音という数は、ある音声学者の研究によりますと、日本人が一息で読める平均的な言葉の数なのだそうです。数と人間との関係は実に不思議で見事だと思います。かるたの句を読んだり聞いたりすることは、人間にとって七五調のリズムと出会う機会でもあります。そして、「触れる」という感覚ですが、これは取り札はもちろん、対戦相手にも触れるということです。人間は触れるという行為を通して、実は自分の身体を確認しています。札に触れるという話で思い出すエピソードがあります。「上毛かるた」の県大会の選手は、札が読まれてから取るまでの時間が0.1秒と言われています。ほとんど反射に近い速さですが、誰よりも先に札を取るために、先ほどの「裏取り」もそうですが、厳しい訓練を積んでいきます。小学校個人の部で優勝、続く中学校個人の部でも優勝という前人未踏の記録を残した選手がいましたが、彼は毎日指腕立て伏せをして本番に臨んだそうです。指の力が弱いと素早くスマートに取れないし、もし相手と同時に競り合った場合、指先どうしがぶつかりあって切り傷や突き指等をしてしまうことがあります。そうならないためにも指を鍛えなければなりません。格闘技にも近い世界です。最後に「嗅ぐ」という感覚ですが、これは精神的な意味でその場の雰囲気や匂い、気配に敏感になるということです。最近では空気が読めないことをKYというそうですが、かるたを取る時は次に何が読まれるか、相手は何を狙っているか、団体戦だったら仲間は何を考えているか等、わずかな気の流れにも敏感に神経を集中して場の雰囲気を捉えていき

ます。ですからかるた取りの練習はKY防止力の育成にも役立ちます。

#### (5) 郷土かるたの本質

このように郷土かるたには様々な教育的効果があります。人間の総合的な能力を引き出すことができる点で非常に意義深い教材です。ですが私はここに来てさらにその存在価値を問います。郷土かるたには、今お話しした教育的効果だけでは表しきれないような秘力、人間にとって生の根源にも迫るような本質がまだあるのではないだろうか。そうでなければ、これほど多くの種類が次から次へと作られてくることはなかったろう。郷土かるたには人々の何か根源にふれるようなもの、無意識のうちに引き寄せてしまうものがあるのではないか。この郷土かるたの秘力について、私は現時点で次のように考えています。

「郷土かるたは、土地とつながり、人とつながり、自分とつながるツールである。」

実はこのフレーズ、本歌があります。私は作家の島崎藤村に関心があって、数年前になります。小諸の懐古園にある藤村記念館を訪ねました。その折に、彼の自筆で書かれた一枚の色紙を目にしました。そこに書かれてあったのが「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」という言葉でした。衝撃的でした。その頃の私は、自分が選んだ研究テーマである郷土について漠然としていて実感がわからず、あれこれと調べてみては考える日々を過ごしていました。ですがこの藤村の言葉に出会った時、「あっ、これかもしれない、郷土かるたの魅力って」とぱっと開けた気持ちになったのです。それですぐに郷土かるたとの関係で整理したところ、先ほど申し上げたフレーズが降りてきたのです。郷土の本質とかるたの本質がかみ合った、まるで貝覆いの蛤貝がカチッとはまったような瞬間でした。つまり、「土地とつながり」というのは、人間は生まれたら必ずどこかの土地と関わらずには生きていけず、またその土地について知る必要があります。郷土かるたが取り扱っているのは「土地」そのものですから、かるたを通じてその土地と出会う、

向き合う、つながることができず。「人とつながり」というのも同様で、人との関わり、つながりなしには人間は生きていけません。かるた遊びで人がつながれるかどうか、かるたで遊んだことのない方にはわかりにくいかもしれませんが、遊んだことのある方ならすぐにぴんとくるかと思います。かるたって一瞬でその場にいる人々を結びつける力があると思います。私は担当授業の中で学生に郷土かるたの体験機会を作っていますが、競技開始前は互いに表情をこわばらせていた学生達も、かるたが始まると一瞬でほころびます。言葉なしに気持ちが通じあう空気が漂います。また、「自分とつながる」というのは、幼い頃からかるたを通して培ってきた土地とのつながり、人とのつながりが、精神的な発達とともに自分とは何かとか、これからどう生きていこうかといったアイデンティティの形成につながっていくということです。私自身、小学校4年生くらいから「上毛かるた」で遊んでいましたが、小さい頃は全然意味の分からなかった札が、年が経つにつれだんだん分かってきて、むしろ「これ作った人はすごい」と感激することがありました。例えば「仙境尾瀬沼花の原」という私の大好きな札がありますが、この「仙境」という表現、よくぞ尾瀬にこんなストライクな言葉を持ってきたなと唸ってしまいます。言葉に対する新鮮な発見といえますか、尾瀬を見つめる作り手への共感といえますか、この札との出会いがあって、私は尾瀬の存在を知り、その美しさを知り、その尊さも知りました。自然は私たちが意識的に関わっていかなければならないと考えるようになりました。このように、小さい頃には分からなかった事が、長じた後、まるでおまじないが解けるように目覚め出てくる。そのような意味で「自分とつながる」としました。以上、長くなり恐縮ですが、郷土かるた基礎基本としての私からの話を終わりにいたします。

### 3 上毛かるたの発展と意義 (山口幸男)

私はちょうど30歳の時に群馬大学教育学部に参りまして、今年で32年目になります。本日の講演会

につきまは、鈴木会長先生から是非にお話しをいただきますが、私一人では不十分と思い、原口先生にも分担をお願いして、二人でなんとかこの役を果たしたいと思っています。

#### (1) 上毛かるたの誕生

郷土かるたの本質に関する原口先生の深遠な話を受けまして、私からは特に上毛かるたを取り上げて、その発展と意義についてレジュメに添って話を進めたいと思います。ご承知の通り昭和22年にこの上毛かるたは発行されました。発行時期が昭和22年ということはとても大事なことです。終戦直後のその時代、この群馬県も戦争の惨禍にあって、郷土が荒廃に帰し、衣食住が不十分で、その中で子ども達が迷っているという状況にありました。群馬県を荒廃から救っていく道はないか、特に目の前にいる子ども達が将来自信を持って生活していけるような夢と希望を与えることができないか、ということから出発したわけです。その頃、日本各地で同胞援護会が組織され、その支部として群馬県同胞援護会ができました。引き揚げ者や戦争の惨禍に遭った方々を援助するという団体でございます。その中心的人物が長野原出身の浦野匡彦さんで、色々な方が集まって協議しておりましたが、その中に須田清基さんという、戦時中台湾で牧師をしておられ、当時、台湾かるたを創った経験を持つ方がおられました。子ども達に夢と希望を与えるものとして人形芝居とか色々あったのですけれども、須田さんはその経験から郷土かるたを創ったらどうかと提案されたそうです。みなさんそれに賛同しまして、上毛かるたの制作が始まりました。早速、上毛新聞にその構想を発表し、読み札に詠む題材を公募しました。その結果、紙の供給すらままならない困難な中であって、272通の応募がありました。それらを上毛かるた編纂委員会が選定し、七五調の読み札に作り、絵札を当時の群馬県の画家の小見辰男氏に依頼して完成しました。

その翌年第1回の県大会が開催されますが、これがまた非常に重要なことです。当時、多くの県民が上毛かるたの理念に賛同し、何とか成功させたいと一丸となって県内各地でかるたの予選競技を行いま

した。最初は学校が中心となって取り組みました。そして、昭和23年に第1回県大会が開催されたのです。それが現在までずっと続いておりまして、今年度は平成21年2月に62回大会を迎えます。県大会に出場するのは大変なことで、まず地区子ども会の予選大会があり、そこで勝ち抜いたものが市町村の大会に出場し、その勝者が県大会に出場するという非常なる難関であります。高校野球での甲子園出場に匹敵するほどの難関といわれ、まさに0.1秒を争う激戦を勝ち抜いてきた人によって県大会が開催されるのです。読み手も大変です。何十年というベテランの方をお願いしています。そしてルールが厳格です。やはり50年、60年の歴史と重みを持つ競技となりますとほんのちょっとしたルールのミスも許されず、毎年審判講習会を開いてその統一を図っております。そういうふうにして60数年間かけて今の県大会が確立していきました。

## (2) 日本一の上毛かるた

私どもは、20年ほど前から全国各地の郷土かるたについて研究し、郷土かるたの歴史なども調べた結果、上毛かるたは日本一のかるたといつて間違いないと断定しました。その理由の第1は、戦後第一号の郷土かるたということです。地方の時代期といわれる1970年代に各地に出来るのですが、そのはるか昔にできた第一号ということです。第2に、発行部数が現在130数万部と飛び抜けて多い点であります。上毛かるたを手本として埼玉県の子ども会が制作した「さいたま郷土かるた」は、たしか20万か30万部です。その後、千葉県の子ども会が群馬・埼玉を手本にして「房総子どもかるた」を作りましたが、県大会は十数回で、発行部数もずっと少ない。第3は、普及度、浸透度がすさまじいことです。群馬のほとんどの子どもは上毛かるたで育ってきたともいえるほどで、これだけのものは全国どこにもありません。これらのことから、まさに日本一だと断定したわけです。

## (3) 七五調、いろは順の札

札に関して何点が説明したいと思います。先ほど

話に出ました七五調、なぜ七五調なのかといいますと、もともなった「いろはかるた」(江戸かるた、京かるた)が基本的に七五調12文字です。一番有名なものは犬棒かるたで、いの札「犬も歩けば棒にあたる」は基本的に七五調です。ではすべて七五かというところではなくて、次の「論より証拠」は全然関係ない。しかし、全体を通してみますと七五・12文字を基本として読み札が作られている。そういう伝統を踏まえて上毛かるたは出来ました。それから「いろは」のかるたということです。最近の子どもたちは上毛かるたをあいうえお順にならべているのですけれども、それは間違いでして、買ったときの札はちゃんと「いろはにほへと」と並んでいるわけです。いろはというのは、空海が平安時代に仮名文字が発明されたときそれをどう体系づけるかということで考案したと言われていています。「いろは歌」にもなっています。それを踏まえてかるたの頭文字をそれで並べていこうということで「いろはかるた」が出来ました。ただ、七五調にしる「いろは」にしる、だんだん子ども達には馴染みにくくなってきた。特にいろはについては最近の子ども達は終わりまで言えない。今は「あいうえお」が主流で、近年作られているかるたの札はほとんどがあいうえお順に並んでいます。それから七五調には長所短所がありまして、私は七五調の方が良いと思っていますけど、この12文字で物事の本質を的確に現すというのは非常に難しいんです。例えば県庁所在地の前橋市を詠わなきゃならないといったときに、前橋を抜いたら前橋の札でなくなるからこれは入れなきゃならない。そうするともうあと8文字しかない。8文字で前橋の本質をどうやって詠おうかとなるとこれはなかなか難しいものです。無駄は完全に省かなければならない、かつ本質はきちんと盛り込まなきゃいけない。それで当時の編集委員会は「県都前橋生糸の市」としました。これを「県庁所在地前橋市」としたらそれで12文字となってしまうので「生糸」にしました。ですから作ることは非常に難しいのですけれども、本質をきちんと盛り込む、しかも短い中に盛り込むというのが非常に良くて、これが上毛かるたが

よく記憶される原因にもなっています。「さいたま郷土かるた」以降のかるたは、ほとんどが五七五の17文字です。というのは、今述べたように七五は作るのが非常に難しいのです。五七五だと俳句調、わずか5文字の違いですが、かなり色々なものが盛り込めます。ですが無駄なものも多く、冗長になります。どちらがよいかというのは賛否両論ありますが、上毛かるたの場合はいろはかるたの伝統を踏まえて「七五」、「いろは」を使っています。群馬県内でその後作られているかるたは上毛かるたがある関係で、七五・いろはもありますが、全国的には少数派となっています。

#### (4) いくつかの札のエピソード

それからいくつかの特色ある札をご紹介しますと、「雷と空風義理人情」、これはどういうエピソードがあるかといいますと、上毛かるたの札が一応全部でき、案を持って、GHQの群馬県支部に検閲を受けに行ったところ、二つばかりの札にクレームがつかれました。人物に関する札です。一つは国定忠治、もう一つは高山彦九郎。国定忠治は群馬県民誰もが知っているという人ですけれども、子どもに夢と希望を与えようというのに博徒をいれるのはどうなのか、まずいんじゃないかと言われたそうです。高山彦九郎は忠君愛国、天皇崇拜の人で当時非常に有名な方で、応募の中に題材としてたくさん寄せられましたが、戦後は民主主義の時代、そういう時代の中で天皇中心の人を入れて良いのか、やめた方が良いという忠告を受けたそうです。それを入れると発行停止になるので、編集委員会ではその二人は除くということになりました。その代わりにというわけでもないのですが、「雷と空風義理人情」の義理人情、そこに国定忠治的な要素をそこはかたなく入れたといわれております。それから「心の灯台内村鑑三」「平和の使徒新島襄」、内村鑑三、新島襄を詠むときに、「心の灯台」「平和の使徒」はなかなか出てくる言葉ではありません。台湾で牧師の経験していた須田さんがキリスト教的観点からそういう表現を使ったのではないかと推測しています。ですから上毛かるたが作られる過程で色々な人が関わっていて、そ

れぞれの人の思いがそこに詠われている。その一つが内村鑑三であり、新島襄であると捉えております。それから人口札「力あわせる二百万」と言う札がございます。これもみなさんさんご承知の通り、かるたが作られた当時は「力あわせる一六〇万」でした。一六〇万人の時代は非常に長く、20数年続き、一七〇万になるなんて誰も考えませんでした。ところが群馬県もだんだん復興してきて、一七〇万になってしまった。そのときにこの札をどうしようかということで、二つ意見がありまして、作った当持が一六〇万なんだからそのまま歴史的な遺産として残しておくべきであるという考え方と、現実は一七〇万になっているのに一六〇万ではおかしいのではないかという両方の意見がございました。結局、とりあえず一七〇万にしておこうという軽い気持ちで訂正したのですが、それからトントン拍子でごく短期間に一八〇万、一九〇万になってきまして、1回変えたものですから、その後も10万人ごとに書き替えるということになり、現在は二〇〇万となっています。この二〇〇万の時代は、少子高齢化で人口もなかなか増えないので、結構長期になるかなと思います。この人口札だけが上毛かるたの全体の札の中で唯一変わっていった札です。ところが、これが時代背景を物語るアクセントの札になっているという点で、大変評判が良いのです。他の札は全部そのままですが、ただ一つ「滝は吹割片品溪谷」は、当初は吹き割りでしたが、地元の人たちが地元では吹き割れと呼んでいるとの声があり、学問的にはどちらでも通用するので、地元の要望もあって読み方を変えました。

#### (5) 上毛かるたの影響力

さて、上毛かるたの影響力についてですが、これは原口先生が先ほどお話しされましたように知識面、情意面、心情面ということで非常に大きい影響力を持っております。十数年前に日本大学で非常勤をやっていたときに、たまたま群馬県出身の学生はいなかったのですが、学生に出身都道府県の郷土の人物で大事だと思う人物を書きなさいという質問をしました。愛知県出身の学生の回答をみたら、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康とありました。たしかに



愛知県の歴史上の人物ですから間違いはないのですが、これは郷土の人物というよりは日本歴史上の人物でして、私はもっと別の人物を期待していたのです。もしそこに群馬県出身の学生がいたら、船津伝次平とか塩原太助とか茂左衛門とかいう名前があげられるだろうと思います。というくらいに上毛かるたは郷土意識・郷土認識の育成に大きな影響を与えています。そのほか協調性、協力性、記憶力、俊敏性、それから勝負力の育成ということへの影響も大きいものがあります。規範性の育成も重要でありまして、上毛かるた県大会は礼に始まり礼に終わるというように礼儀が重視され、ルールを守ることでも大切にされています。それから様々な面での活用、学校教育では社会科はもちろん特別活動や国語の中など色々な面で利用されておりまして、これがあるから群馬県に関する学習ができるといいますか、学校教育が出来るという部分も相当あります。他の県ではそういうことはできません。県内のマスコミでも多く取り上げられていますし、色々な書物も出ておりますし、上毛かるたや郷土かるたに関するイベントが年に何度もあちこちで開催されています。関越交通でしたか、「上毛かるた紀行」としてバスで上毛かるたゆかりの地を巡る観光コースも出来ています。数年前に群大社会科の卒業生が卒業記念として何かやろうということで「リアル上毛かるた大会」を行いました。実際に詠まれている四十数カ所を車で訪ねて一番早く着いた人に高得点がつくというルールで行い、上毛新聞にも大きく取り上げられました。このように色々な面で活用され、大きい影響力を持ち、これだけのものは日本中どこにもないと思います。また、かるたの数は群馬県には全国最多の115種があります。大会などの活動をしているという質的側面をも考慮すると、群馬県の地位はきわめて大きく、富士山でいえば山頂の所に群馬県があり、五合目くらいに埼玉県があり、2合目くらいに千葉県があり、県大会をやっているのこの3県だけで、あとはだいたい1合目から2合目くらいにいっぱいあるという状況といえます。

## (6) 上毛かるた発展の要因

では、上毛かるたの発展の要因と言うことですが、現時点ではっきり言えることは、終戦直後に作られたということと、大会などの組織が確立しているということが大事な点です。終戦後直後に作られたというのは、郷土を荒廃から救おう、子どもに夢と希望を与えようというスローガンのもとに、県民が一丸となってその崇高な理想に向かって邁進した、一致協力できたということ。その後の数百のかるたの多くは既に衣食住が足りている時代に作られた。周年行事とか、市町村合併とか、地方の時代とかということを契機に作られたのですが、衣食住の日常的な生活はある程度確立していたので、切実感というのは昭和50年代以降あまりない。ですから昭和22年にできたということが非常に重要で、みんながその切実性のもとに一致協力して発展させていったということ。もう1つの重要な要因は組織的な確立ができてきていることです。現在子ども会育成団体連絡協議会が予選大会から県大会まで仕切っているわけですが、これに関わる育成会の親たちの数は相当なものです。これを金額に換算したら莫大な金額になります。育成会のみさんのボランティア活動があっただけで競技大会が開催できるのです。そのような組織的な確立がなければ大会は続かなかっただろうと思います。

これら2つの要因が中心的なものです。さらにその奥を探ると何が言えるかと言いますと、これは私の仮説として聞いておいていただきたいのですが、先ほど言いました国定忠治がやっぱりあるんじゃないか。郷土かるたにしろ、百人一首にしろ、トランプにしろ、やっぱり勝負だ。勝負に賭ける執念っていいですか、そういうものは国定忠治以来群馬県民に脈々と受け継がれてきている。そういうものが根底に何かあるんじゃないだろうか。さらにそれを探れば、群馬県の風土、内陸性や乾燥地域であること、そういった風土的な基盤が背景にあるのだと思われ。また、それと関連して、総理大臣が4人も出て、しかも自民党ばかりだというような事から考えてみても、郷土意識といえますか、郷土愛というものがそもそも群馬県民の場合には強いので

はないだろうかと思われま。これらが基盤・背景としてあって、具体的には先ほど言った2点が要因となって現在まで続いているように思います。その他の郷土かるたについては時間がないので一言だけ言っておきますが、特に「富士見かるた」ですね。富士見かるたは市町村郷土かるたの中では日本最高峰です。現在四十数回の大会を数え、これだけのものは日本全国どこにもごぞいませ。ですから群馬県には、郷土かるたの最高峰である上毛かるたと、郷土かるたの大半を占める市町村郷土かるたの最高峰である富士見かるた、この2つの日本一が存在しています。富士見村が前橋市に合併した後、どうなるのかということ是非常に大きな問題であります。富士見かるたは日本における市町村かるたの最高峰ですので、たとえ合併しても、富士見かるた大会は何らかの形で行っていくべきであろうと思っています。

#### (7) 郷土かるた王国「群馬」の意義

最後にまとめとして、郷土かるた王国「群馬」の意義ということで3点述べたいと思います。第1は、群馬県民の郷土意識とか連帯感というものの源泉になっているんじゃないかということ。群馬県民の証であるとか、群馬県民としてのアイデンティティだというふうにも言えると思います。しかも、むりやり押しつけるのではなく、かるた競技をしながら自然にそういうものが培われているというところが大事です。学生たちに、「あなたの郷土・ふるさとはどこですか」と聞いてみると、他県の人はいは学区域とかせいぜい市町村くらいまでの範囲を言いますね。ところが群馬県の人には躊躇なく群馬県という範囲を郷土と考えるわけです。上毛かるたによって県全体に対する意識が常に醸成されているためではないかと思われま。

第2に日本歴史上の快挙であるということ。これについては今後詰めていかなければならない点もありますが、200万人の県民規模で、ほとんどの子ども達がそれに関わって、しかも県内各地から勝ち抜いてって県大会まで、それが60年以上も続いているという現象は、おそらく日本の歴史上、なかつ

たことではないか。しかもそれが日々・毎年更新されている現在進行形のものであります。そうした流れの中に今我々は存在している。ですから私が恐いというか、心配しているのは、これがいつ終わりになるのか、いつまで続くのか、永久に続くことはないでしょうから、どこかで終止符が打たれると思うのだけれど、どこまで続いていくのかなということが興味津々で、日本の歴史上の重大な一頁を作っているというものであろうと思います。これに比肩できるのが、長野県の県歌「信濃の国」で、明治33年、1900年に作られ、以来今日まで歌い継がれています。百年以上の歴史があるので、上毛かるたよりずっと長い。長野県と群馬県はともに内陸県で、養蚕製糸の県という共通性があります。そこに何か秘密があるようにも思われま。異なるのは、長野県は盆地に分かれ、それぞれある意味で独立的で、それぞれが個性豊かなので、それらを分立たせないで一つにまとめていくためにはどうしたらよいかということで「信濃の国」ができた。一方、群馬県はその逆で、利根川が大動脈として流れ、ほとんどの川が利根川を目指して集まってくる。そういう地勢、風土、生活は長野県とは逆の中央集権的な傾向が強い感じがする。それを体現したものが上毛かるたなり郷土かるたではないでしょうか。このように風土的基盤は異なりますが、日本における郷土意識の二大シンボルであるといえます。

第3に、わが国の郷土かるた文化活動の中心地であり、リーダーであり、発信地であるという点です。とにかく日本一の郷土かるた、しかも単なる遊びではなくて、平安時代の貝覆い貝合わせから発展した日本古来の日本独自のカード文化、遊び文化。そういうものの中心地がここ群馬県にある。従ってその役割は、それをさらに発展させ、その考え方を日本全国に発信していくこと、さらに世界に類例を見ない日本の伝統文化を世界各地に発信していく、そういう役割を群馬県の人には持っていると思います。ブラジルでサンパウロかるたができる、ロンドンでロンドンかるたができる、テキサス州でテキサスかるたができる、それぞれでその土地に応じたかるたが作られ、それらの郷土かるたや関係者がみんな日本

に集まって、世界郷土かるたサミットを開く。どこで開くかと言いますもちろん群馬県で開く。群馬県において世界郷土かるたサミットを開くというのが私の最終的な夢です。私は定年まであと3年しかないのですこまでできるのか、ちょっと心許ないところがありますが、その前段階として、既に日本郷土かるたサミットを開きました。しばらくまえに群馬県で国民文化祭が開かれたときに、郷土かるた文化展とその一環としての郷土かるた全国サミットを開催してほしいと提案しました。郷土かるた活動を本格的に行っている県は群馬県と埼玉県なので、全国郷土かるた競技大会は群馬県と埼玉県でやっても許されるのではないかと考え、埼玉県の子ども会にお話をもちかけて、群馬県生涯学習センターで開催しました。3回勝負でありまして、1回目は「さいたま郷土かるた」を使い、2回目は「上毛かるた」を使い、3回目は両かるたを半数ずつ混ぜて競技しました。上毛かるたとさいたま郷土かるたは礼も読み方も全然違うので大変でしたが、結果は埼玉勢が勝ち、第1回目の郷土かるた全国競技大会は終了しました。第2回大会はなかなか機会がなく、未だ開催していないというのが現状です。そういう形で全国に広めると同時に世界各地に郷土かるたを広めていく。国際化とかグローバル化と呼ばれる時代の中で、郷土の文化、それはまさに日本の文化なんです、それを広めていくという非常に重要な役割を担っている。それから私は地理が専門ですが、学校の地理学習の中で関東地方の学習をします。関東地方は中心が東京ですので、どうしても東京中心で考えられ、そうしますと、群馬県は関東地方のはずれという位置づけになってしまう。東京から見るとはいいいけど、群馬県の立場で考えたときにこれで果たして良いのかというのが前々からの疑問でした。たとえばずれであろうとも、先ほど申しましたが、それぞれの場所にはそれぞれの歴史とか文化、自然を背景とした特色ある独特なものが育っている。それを育てていくことによって、全国、あるいは世界の中心地になることができるのだという考えが大切ではないかと考えます。その一つの例が群馬県の場合では郷土かるたで、群馬県は日本の郷土かるた文化の中心であ

るし、世界の中心でもあり、そこから文化を発信していくという拠点としての役割を持っている。今後は、こういう考え方が必要になってくるのではないかと考えています。ここには群馬県の方々、同窓生、学校教育や生涯学習に関わる方々がたくさんいらっしゃるの、そういう考え方の上に立って群馬県の誇るべき文化をさらに維持発展させていってほしいと願っております。以上で私の話を終わります。

#### 参考文献

- (郷土かるた、上毛かるた等に関する筆者らの研究等一覧)
- 原口美貴子・山口幸男 「群馬県の歴史的人物知識と上毛かるた」、群馬大学社会科教育論集 第2号、1993.3.
- 原口美貴子 「群馬県の史跡知識と上毛かるた—小・中学生に対する調査—」、群馬大学社会科教育論集 第3号、1994.3.
- 原口美貴子 「群馬県児童・生徒の郷土認識における上毛かるたの意義」、群馬大学社会科教育論集 第3号、1994.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「郷土かるた遊びと郷土認識の形成—群馬県の上毛かるたの場合—」、群馬大学教育実践研究 第11号、1994.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「郷土かるたの全国的動向」、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編 第44巻、1995.3.
- 原口美貴子 「郷土かるたを活用した社会科授業—太田市立九合小学校の事例—」、群馬大学社会科教育論集 第4号、1995.3.
- 原口美貴子 「学校教育における上毛かるたの活用」、群馬大学教育実践研究 第12号、1995.3.
- 山口幸男・原口美貴子 『郷土かるたと郷土唱歌—その社会科教育論的考察—』、近代文芸社、1995.6.
- 原口美貴子 『上毛かるた その日本一の秘密』、上毛新聞社、1996.1.
- 山口幸男・原口美貴子 「上毛かるた50周年記念フォーラムの記録」、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編 第46巻、1997.3.
- 山口・佐藤・原口 「児童・生徒の群馬県認識と上毛かるたの影響」、群馬大学社会科教育論集 第6号、1997.3.
- 大崎賢一 「群馬県における市町村かるたの活動と児童・生徒の郷土認識への影響—勢多郡富士見村の場合—」、群馬大学社会科教育論集 第6号、1997.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「埼玉県の郷土かるた集(第1集)」、群馬大学教育実践研究 第14号、1997.3.
- 山口幸男・原口美貴子 「日本一の群馬大学郷土かるたコレクション」LINE(群馬大学図書館館報)、No.272、1997.12.

- 山口幸男・原口美貴子 「全国郷土かるた探訪」、群馬大学教育実践研究第15号、1998.3.
- 山口幸男・志賀洋子 「福島県の郷土かるたと明治期郷土唱歌」、群馬大学社会科教育論集 第7号、1998.3.
- 今泉 晃 「桐生市とその周辺地域における上毛かるたの活用に関する社会科教育論的考察」、群馬大学社会科教育論集 第7号、1998.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「上毛かるたの札の分析—社会科郷土学習の基礎資料として」、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編 第45巻、1998.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「連載：地域学習に役立つ郷土かるたアラカルト」(全12回)、社会科教育(明治図書)、1998.4月号～1999.3月号.
- 山口幸男・原口美貴子 「地域から教土へ—郷土かるた・郷土唱歌の教材開発—」、次山信男編『子どもの側に社会科教育の創造』所収、東洋館出版社、1998.7.
- 山口幸男・原口美貴子 「特集 日本一の上毛かるた」、上州路No.295、1998.12.
- 山口幸男 「郷土かるた王国を行く—吾妻郡の町村かるた—」、LINE (群馬大学図書館報)、No.278、1997.3.
- 原口美貴子 “Presentation of Jomo Karuta at the workshop in Fulbright Memorial Fund Teacher Program”、群馬大学社会科教育論集 第7号、1998.3.
- 原口美貴子 「郷土かるたつくりの工夫点はどこか」、社会科教育(明治図書)、1998.11.
- 原口美貴子 「大学生と作った群馬県のかかるた1997—社会科郷土学習の一環として—」、群馬大学社会科教育論集 第8号、1999.3.
- 山口幸男・原口美貴子 「連載：総合的学習に役立つ郷土唱歌・郷土かるた」(全12回)、総合的学習を創る(明治図書)、1999.4月号～2000.3月号.
- 原口美貴子 「上毛かるたの考察と教材化」、山口・原口他「群馬県における社会科新郷土教材の開発に関する研究」所収、群馬大学教育学部紀要人文社会科学編 第47巻、2000.3.
- 原口美貴子 「郷土かるた王国群馬」、山口編『現代群馬の郷土教材探究—社会科学習・総合的な学習の基礎として—』所収、あさを社、2001.3.
- 志賀洋子 「福島県における郷土かるたに関する社会科教育論的考察」、群馬大学社会科教育論集 第10号、2001.3.
- 佐藤茂幸 「市町村郷土かるたが児童・生徒の郷土認識に与える影響—埼玉県妻沼町“妻沼郷土かるた”を例に一」、群馬大学社会科教育論集 第10号、2001.3.
- 原口美貴子・山口幸男 「全国郷土かるた目録1999」、群馬大学教育実践研究 第17号、2000.3.
- 山口幸男 「郷土かるた王国群馬」、図書館雑誌96-8、2002.8.
- 山口幸男・原口美貴子 「高校生対象公開講座『郷土かるたの全国展望と平成群馬かるたの制作』の実践報告」、群馬大学社会科教育論集 第12号、2003.3.
- 原口美貴子 「上毛かるた海をわたる—ギリシャの巻—」、LINE (群馬大学図書館報)、No.290、2004.3.
- 日本郷土かるた研究会 『会報郷土かるた第1号』(市町村合併と郷土かるた、全国の郷土かるたの刊行、西宮貝類館を訪ねて、平塚市港地区郷土いろはカルタ)、2004.10
- 日本郷土かるた研究会編 『郷土かるたハンドブック』全68頁、2005.2.
- 原口美貴子 「郷土かるたの国際化・情報化に関する動向」、群馬大学社会科教育論集 第10号、2005.3.
- 原口美貴子 「郷土かるたの国際化」、山口・山本・黒崎・佐藤・原口編『社会科教育と郷土・国際化—群馬・新潟からの発信—』所収、あさを社、2005.10.
- 日本郷土かるた研究会 『会報郷土かるた第2号』(郷土かるたの中の地震・津波、戦後の郷土かるたを馬籠を訪ねて、放送大学での上毛かるたの講義、郷土かるた大会全国ベスト、郷土かるたハンドブック紹介)、2005.10.
- 原口美貴子 「郷土かるた研究の展開」、群馬大学社会科教育論集 第16号、2007.1.
- 社会科専攻生一同 「群馬大学教育学部におけるリアル上毛かるた大会の実践—社会専攻による試み—」、群馬大学社会科教育論集 第16号、2007.1.
- 日本郷土かるた研究会・原口美貴子編 『新しい群馬のかかるた第1集1998・1999』、2007.3.
- 山口幸男 「郷土かるたによる群馬の地域探訪—県のメルガマ「ぐんま見聞録」から—」、群馬大学社会科教育論集 第17号、2008.3.
- 日本郷土かるた研究会 『会報郷土かるた第3号』(郷土かるたの野外展示、千葉市柏市・宮崎県清武町での郷土かるた講演会)、2008.10.
- 日本郷土かるた研究会編・発行 『全国の郷土かるた(増補版)』全95頁、2009.3.